

Commenter en japonais le texte suivant et le traduire de la ligne 1 「私はその男...」 jusqu'à la ligne 14 「ほうり投げるかも知れない。」.

はしがき

私は、その男の写真を三葉に見たことがある。

三葉は、その男の、幼年時代、とでも言うべきであろうが、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかかまれ、(それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される)庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾げ、醜く笑っている写真である。醜く、けれども、鈍い人たち(つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち)は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね。」

と、いい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞えないくらい、謂わば通俗の「可愛らしき」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いざざかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ。」

と願る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪

いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、頭に醜い皺を寄せているだけなのである。「皺くち坊ちゃん」とでも言いたくなるくらい、まことに奇妙な、そうしてどこかげがらわしく、べんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第三葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌していた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白いハンカチを覗かせ、藤椅子に腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどこの笑顔は、皺くちの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑にはなっているが、しかし、人間の笑いとどこやら違ふ。血の重さ、とでも言おうか、生命の姿さ、とでも言おうか、そのような充実感、は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のまらに軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つまり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしやれと言ってももちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談

5

10

15

20

25

30

人間失格

35

じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

40

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようなのである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちて、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私はつくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も平凡、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れて、部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すっと霧消して、どうしても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、ネライラして、つい眼をそむけたくなる。

45

50

所謂「死相」というものになつて、もつと何か表情なり印象なりがあるものだらうに、

人間のからだに駄馬の首でもくつつけたなら、こんな感ずるものになるであらうか、とにかく、どこどいう事なく、見る者をして、ぞつときせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

Dazai OSAMU (1909-1948), 人間失格, 1948.